

修身初訓
三

前清三才內記
年茶上會
福國第一師範學校
(等附內書)
第 1 冊
社 會 科 學 門
教 育 部
教 法 法 修 身
第 9 冊
分 類 號
251332.1

T 1A1
22
Mi 77

修身初訓卷之三

緒言

是初等生第三年前期ニ教シカ爲設
シ者ナリ、其科目ヲ分テ四章トス、孝悌
慈愛、言語、容儀ナリ、前篇ニ比スルニ、
文意少シク高尚ナリ、其履行ニ於ル益
勉勵スヘシ、

明治十五年

編者識

修身初訓卷之三

宗 盛年編輯
宮本茂任校閱

第一章

○孔子曰く、身體髮膚、これを父母より
受く、敢て毀傷せざるを、孝の始なり。
身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、
以て父母を顯すを、孝の終なり。

夫孝ハ親ニ事ふる事始マテ君ニ事
ふる事中也身を立てる事終る事
天子より庶人に至るまで孝終始な
うして患ひ及ばざるものハ未だれ
あらざるなり

○孝子の深愛あるものハ必和氣あ
る和氣あるものハ必愉色あり愉色
あるものハ必婉容あり孝子ハ玉を
執るゝ如く盈るを奉ぐるゝ如く洞

く屬く然として勝へざるゝ如く將
ふ之を失ふんとするゝ如く嚴威儼
恪ハ以て親ニ事ふる所ハあらば
○父母ハつかへて常ニ力を盡し勝
下のつとめ怠らば古語ハ夕ニ定め
て朝ニ省ると云る如くすへし
常ニ養ひをかへるゝ飲食の味を
くして自ら寒暖の節を嘗て
むつゝ同上

冬、を暖ふ、夏、を涼く、出れハ告げ
歸きハ對面、色を和らゝふ、父母
をよろこばしめ、父母の身を養ふ、二
つのつやめ、闕くハからば、是ハ家人
の子たるもの、定りたる法なり、同上
○司馬君實曰く、凡そ諸の卑幼、事大
小となく、専ら行ふにやを得ること
なれ、必家長ハ咨稟せよ
凡そ父母の命を受けてハ、必籍ヲ記

て之を佩ひ、時ハ省りて速く之
を行ひ、事畢らば則命を返せ、
或る命ある所、行ふ可らざるもの
ハ、則色を和らげ聲を柔らめ、是
非利害を具して之を白し、父母の
許せざるを待ちて、然後之を改めよ、
若し許さずんハ、苟も事ハ大害なき
者ハ、亦當さる曲從す、若し父母
の命を以て非とて、直ちハ已む志

仙身物語 卷之三
を行く、執る所皆是なりと雖猶不
順の子とす、況んや必いさへ是あら
ざるをや、

○弥四郎ハ、筑前國夜須郡朝日村の
農夫かり、家貧ゆゑ、朝夕火を擧る
こと難し、然きとも天資篤實、父母に
孝養の志深く、父死して追孝を固ま
りなり、母はつかふるおや、父は異ら
に、或時母病あり、晝夜衣帶を解す保

護し、衣類の澣濯ふ至るまで懇ふ之
を取り、母遂に八十三歳ふて死せ
り、

弥四郎父母の喪に哀慕をなほし、
忌日毎に必墓に謁し、生に對する
や如く談話して、少時を去る忍びず、
弱齡より牛馬をも勞たり、飯をも乘
せ、おやなく、いある農事の忙しき時
も、鞭を以てす、其稟質粹美ゆゑ、孝

心ふかく上を
敬ひ人を阿そ
れみ一族も固
よまなり諸人
ふも睦し是ふ
化せられて一
村の風俗おの
づから淳厚ふ
なりたる



其篤行是の如くなれハ屢褒賞を得
て、遂ふ生涯租税賦役をも免され
のみならず藩主黒田氏今様の曲を
作り歌へり誰う圖らん或時仁孝天
皇禁中ま在りて其曲を歌はせ給ひ
とかや僻遠なる筑紫の賤は農夫
の事を禁中ま在りて歌はせ玉ひ
ち豈孝感のいたす所ならんや
○曾子曰く人の生るゝや百歳の中

疾病あり、老幼あり、故に君子は、其後
をへからざる者を思ふて、先づ施す。
親戚既没らば、孝を欲すと雖、誰か爲
ふ。孝せん、年既耆艾ならば、悌を欲
と雖、誰か爲ふ。悌せん、故に孝も及
ばざるこゝあり、悌も時ならざるこ
とありとハ、其斯の謂う。
○兄弟を形を分ち、氣を連ぬる人を
と、其幼きふ方りてや、父母左提右挈

前襟後裾、食ハ則案を同うし、衣ハ
則傳へ服し、學べハ則業を連祿遊べ
ハ、則方を共ます、悖亂ある人と雖、相
愛せざる能はざるなり、顏子家訓

○有馬頼永藩中ふ令し、節儉を行ふ
ふとを告げ、諸事ゝか節約なり、其弟
孝五郎、四書大全の善本を、あゝあゝ
んと欲す、其傳福永万次郎、これを参
政ふ告ぐ、参政、方ふ節儉を行ふを以

て聴かず、從來の古本にて、可なりん
と云ふ、頼永とを聞き、孝五郎文學
不嚮ひ、善本を得んと欲せらるゝを
喜む。――き事なり、節儉を此等の謂ふ
非ず、隨意に購はるつゝと言つる
○北魏の楊椿、その弟津と友愛最も
厚し、兄弟毎日、廳堂に聚り、終日相對
し、未嘗、内に入らず、一の美味あれと
も、集らさきハ食はれ、廳堂の間、幃幔

を以て隔障し、時ふ就きて、寢息の所
とす、

椿、年、老い、曾他所より、酔てかへる、津、
扶持して家へ還り、寢室の前へ假寢
し、安否を兼ね候ふ、

椿、津、年六十を過ぎ、並ふ台鼎へ登る、
而る、津、常々且暮参問し、椿坐を命
せさきハ、津敢て坐せし、
椿近く出て、或る日斜ゆゝて至ら

されハ先ツ飯せす、椿還るを待て共
小食ふ、食ハ則津親ら匙箸を授け、
味皆先ツ嘗む、椿食を命じて、然して
後小食ふ、

津肆州の刺史となる、椿京の宅は在
り、四時の嘉味ある毎も、使の次小因
て之を附す、若し或も未だ寄せさ
ハ先ツ口小入きす、一家の内、男女
口、小爨を同く、聊間言を、

第二章

○曾子曰く、孝子の老を養ふや、其心
を樂しめ、其志小違えず、其耳目を
樂しめ、其寢處を安し、其飲食を以
て、之を忠養む、是故小父母の愛する
所も、亦これを愛す、犬馬小至ても盡
く然り、志うるを況んや人乎、於てを
や、

○家小居ては、廣く人を慈愛し、善を

行ふへ、廣く人を慈愛すること久
くハ、天の悦ひ深くして福を受ける
こと疑な、天道を還すおやを好む
善を行へハ福を下し、惡を行へハ禍
を下す、此理必違はざるなり、家道訓
○寛保壬戌の歲、関東大水、武州八間
郡最も其害を受く、民舎湮没、數十里
小亘る、奥貫友山、食を舟に載せ、僮僕
と禁じて、餓者に飲食せしめ、病む

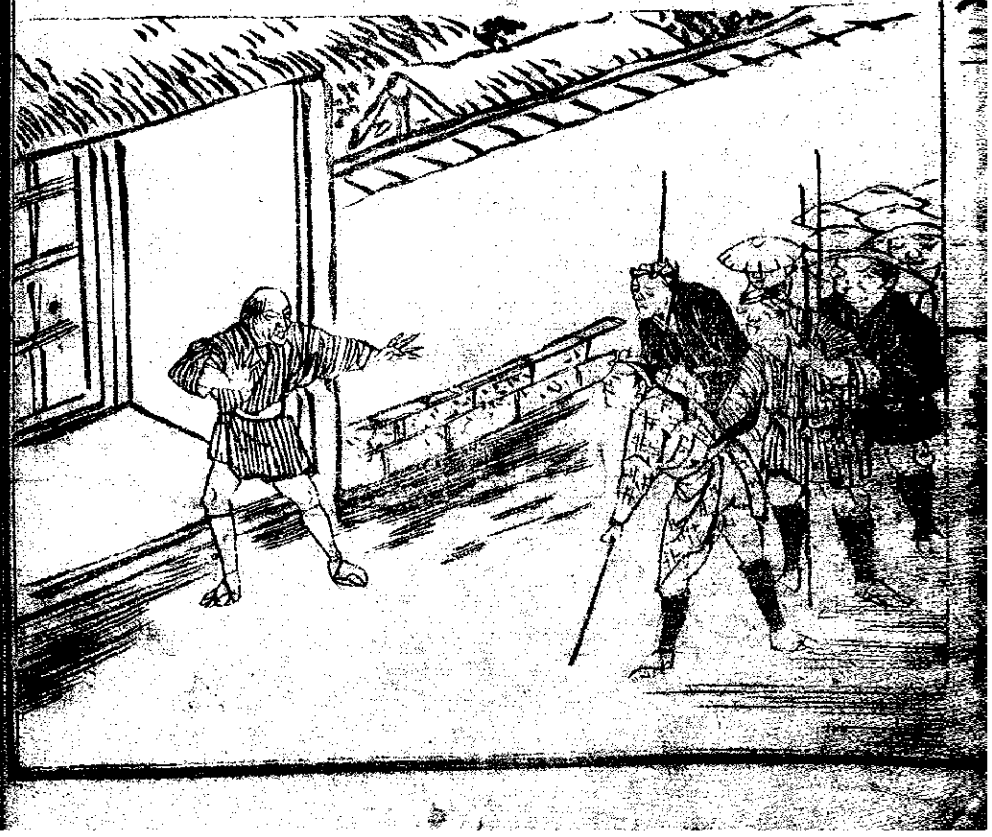
のハ、悉く之を載せて還り、已に家小
撫養すること、數百人、因て其父は請
て曰く、大人平生兒を誨へ儉を力め
用を節よせむ、豈今日の急あるを
為め、願くハ家世の積聚を傾けて、
以て之に當ん、父喜て之を許す、
是に於て大小倉廩を發き、飢民は施
與す、流民男女傳へ聞て争ひ至り、門
前市の如く、友山多く粥を作りて、奴

僕の茶議なる者、數人を擇ひて之を待たしめ、又人ことふ米四升を與へて行しむ。受る者感謝せざるハなし。既ふして廩盡く、又人をしめて金を四方ふ齎らし、穀粟及ひ大豆蕎麥を買はしむ。金又盡く、又父より請ひ、田宅を富商ふ質し、金を得て之を繼ぐ。十月より翌年四月ふ至りて止む。惠施及ふ所、四十八村、終始すくふ所、十一万

六千餘人なり。後明和中武藏相摸上野荒饑し、姦民相あつまゐりて盜をなす。富商を劫奪し、民舎を毀壞し、暴亂をなはしたる。まさ小友



山の家ふ及ハ
んとす、一人走
り至り、大ふ其
徒を呼て曰く、
是我々奥貫翁
の居なり、昔寛
保の水災、翁あ
るを以て、我々
祖父母兄弟を



して生存することを得せしむ、汝お
きを知る、衆大小駭き、相顧みて曰
く、我儕、^{いひ}力^{ちから}を以て、恩を報ゆ^{たまは}
なく、反て虐すへけんやと、門外小俯
伏して去る、故ふ其四鄰ともあこき
為ふ、暴亂を免る。

○齊の景公、爵^{しやく}斂^{れん}を採る、斂弱ふ、故ふ
之を反す、晏子^{えんし}之を聞き、請を待す、
て入りて見ゆ、景公汗を出一惕然た

王晏子曰く、君胡を爲る者ぞ。景公曰く、我爵穀を探りて、穀弱し、故ふ之を反す。晏子逡巡北面再拜して之を賀す。吾君聖王の道あり。景公曰く、寡人爵穀を探りて、穀弱し、故ふ之を反す。其聖王の道ふ當るものぞ。何ぞや。晏子對へて曰く、君爵穀を探りて、穀弱し、故ふ之を反す。是き幼を長せ、志むるあり。吾君の仁愛禽獸ふ加はる、而

るを況んや人ふ於てをや。此き聖王の道あり。

第三章

○孔子曰く、言行ハ君子の樞機、樞機の發、榮辱の主なり。言行ハ君子の天地を動す所以なり。慎まざる可んや。

○孔子郷黨ふ於てハ、恂々如たり、言ふこと能はざる者ふ似たり。其宗廟

朝廷ふ在ても、便々として言へり、唯
謹めるのみ、

○孔子曰く、與ふ言ふへくして、之と
言はさきハ人を失ふ、與ふ言ふ可ら
まゝして、之と言ふも言を失ふ、知者ハ
人を失はさ、亦言を失はさ、

○子貢曰く、君子ハ一言以て知と
一言以て知あらずと、言慎むさる
可らざるなり、

○孟子曰く、言通ふて指遠きもの
ハ善言なり、守約して施さること博
きものハ善道あり、君子の言、帶を下
らずして道存す、

○司馬牛仁を問ふ、子曰く、仁者ハ其
言や認ふ、曰其言や認ふ、此き之を仁
と謂ふ、曰く之すること難し、之を
言ふこと認ふことなまことを得ん
や、

○我々言語吾々耳自聽くへ、我々
舉動吾々目自視るへ、視聽既小心
不愧ぢされ、則人も亦必服也、言志
晩録
○言語た、多寡を問は、言志
晩録時中を
要す、然る後人其言を厭はす、言志
晩録
○人の言を聽く、多きを厭はす、賢
不肖となく、資益あり、自言ふ、則多
きことなかれ、多けき、則言過あり、
同上

天地間の靈妙人の言語ふく者か
禽獸の如き、徒に聲音ありて、僅
小意嚮を通するのみ、唯人の則言語
ありて、分明小情意を宣達す、又抒
て文辭となせ、之を遠方小傳へ、後
世小告へ、言志
後録

○言ハ微より起りて、用たること博
からんとす、能く道小違はす、て化
すへく、令すへく、告くへく、訓へて以

て生物ふ推すつゝ、其縦みゝて慎ま
さるふ及て、反て禍をあす、韓退之

○王文正人と言笑すること寡ゝ其
語簡と雖も、能理を以て人を屈す、默
然たること終日、能く其際を窺ふも
のなゝゝ事を上の前ふ奏するふ及て
ハ群臣の異同、文正徐ふ一言ゝて以
て定まる

○胡文恭人となり清儉謹黙、内剛

ゝて外和す、群居ゝて笑語謹譚す、獨
顏色を正うゝ温々とゝて聲氣を動
ゐさす、人と言つハ必思ふて後ふ對
ふ、故ふ官ふ蒞ゝ事ふ臨む、謹重ふゝ
て輒く發せず、發あるも亦回止す可
らけ、其趣ハ仁厚ふ歸するを要す

第四章

○曾子曰く、君子の道ふ貴ふ所の者
三つ、容顏を動かゝて、斯ゝ暴慢ふ遠

作事言 卷之三
さるる、顔色を正うして、斯ふ信ふ近
つき、辭氣を出して、斯ふ鄙倍ふ遠さ
かる。

○足の容ハ重く、手の容ハ恭しく、目
の容ハ端しく、口の容ハ止み、聲の容
ハ静ふ、頭の容ハ直く、氣の容ハ肅し
く、立つ容ハ徳ふ、色の容ハ莊なり、
○凡そ人の以て人たる所の者ハ、禮
義あり、禮義の始ハ、容體を正うし、顔

色を齊へ、辭令を順ふるふ在り、容體
正しく、顔色齊ひ、辭令順ふて、然る後
禮義備はる、以て君臣を正うし、父子
を親しき、長幼を和く、君臣正しく、父
子親しき、長幼和きて、而る後禮義た
つ、同上

○凡そ身を修め家を齊ふるふハ、禮
を以てし、禮といふ人倫の作法あり、
心ふ慎あり、身ふ則あるを、禮と云ふ

慎みかく、則ちけきハ、人の心を失ふ
ひ、身の目さありく、人ふ交ハきハ、人
倫の道たゞに、家道訓

そき人の禽獸ふ異あるハ、禮阿れハ
なり、禮あけきハ、禽獸ふ同ハ、禮を行
ふハ、難く苦ハ、事ハ非ず、事ことハ
行ふハ、道ハ、従ひて行ふ、故ハ心安
くして、身の行ハ、穩ハ、あり、正路なる
平地を行くハ、如ハ、故ハ、人禮阿れハ

安ハ、禮あけきハ、危ハ、是を以て人た
る者ハ、禮を行ハ、ざるハ、からハ、同上

○劉忠定賓客を見て、談論時を踰ヘ
て、體歌側なく、肩背竦直ハ、して、身少
も動ハ、す、手足ハ、至ても、亦移さず、
○衛侯楚ハ、在リ、北宮文子楚の令尹
圍ハ、容儀の惡ハ、きを見て、衛侯ハ、言
て曰く、令尹將ハ、禍ハ、免さざらんと
す、詩ハ、曰く、威儀を敬慎す、維民の則

なりと令尹人
臣の威儀を
民これみ則と
ることなり民
の則とらざる
所ありて民の
上み有り以て
終を善くすべ
からん



侯曰く何をう威儀と謂ふ文子曰く
威ありて畏るべき之を威と謂ふ儀
ありて象るべき之を儀と謂ふ故ふ
君は君の威儀あり其臣畏て之を
愛し則て之ふ象る故ふ能く其國家
を保て令聞せふ長し臣は臣の威儀
あき其下畏て之を愛す故ふ能く
其官職を守り族を保ち家は宜し是
より以下皆かくの如し是を以て上

下能く相固き家

明治二十一年二月調査

代價

修身初訓卷三終

明治十五年三月廿四日版權免許
同年五月刻成

編輯人 福岡縣士族 宮本茂任

同 縣士族 宗盛年

同縣同區地行公番町字千巻地

出版所 連壁書樓 製本會

同縣同區千巻町字千巻地